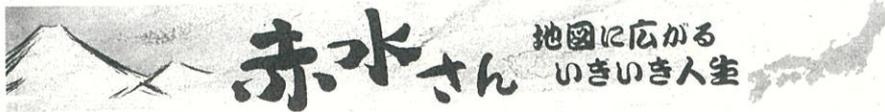


8 隠居は御免



江戸時代の大ベストセラ
ーとなる日本地図（通称・
赤水図）を世に送り出した
長久保赤水さん（1717-
1801）は常陸国赤浜
村（現高萩市赤浜）の農民
出身ながら勉学に励み、数
え61歳で6代水戸藩主・徳
川治保の侍講（家庭教師）
に大抜擢されたことは前々
週（第6回）で少しご紹介
しましたね。赤水さんは江
戸と呼ばれ、81歳までの約
20年を小石川の水戸藩邸
内の儒者長屋で暮らしま
す。



赤水が作製した「地球万国山海輿地全図」
市歴史民俗資料館蔵

還暦過ぎ 息子に「菊の塩漬け送れ！」

明3）年には「大清広輿図」（いまの中国の地図）、その後「地球万国山海輿地全図」（世界地図）と立て続けに完成させる、旺盛な執筆っぷり。あくなき知的探求とチャレンジ精神には脱帽ものです。

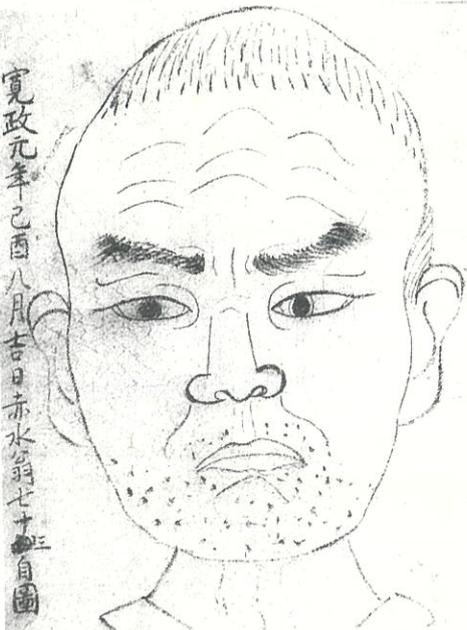
ところが、赤浜村で暮らす長男の藤八郎、次男の四郎次ら子どもたちは父の健康が心配。何しろ還暦を過ぎていきますからね。「おきゆうを200カ所した」とか「病気も快復した」などの手紙がとどくとなおさら。「隠居格になったのを機に赤浜に戻って」と気遣うのも当然です。

しかし、赤水さんは70歳の時、水戸藩の歴史書「大日本史」の「地理志」の執筆

筆を治保から任されるんですね。大日本史といえは黄門さまでおなじみの2代藩主・徳川光圀が始めた大事業。意気に感じないはずがありません。

その後もたびたび、子どもたちから手紙が来たのでしよう。赤水さんはいつにこう書くのです。

「私は（もう）75歳になったのだから、お前たちの意見などに従う必要はない。（隠居を願っていることも）余計なことである」さらに「菊の塩漬けが足りない」「梅干しの黒焼きを送れ」などと、手紙をさかんに送ります。「（仕事するの）眼の力の薬になるので欲しいのである」その頃の自画像が残って



73歳の赤水の自画像

寛政元年己酉八月吉日赤水翁七十歳自画像

高萩市歴史民俗資料館蔵

います。「黒くて太いまユ、獅子っ鼻」。これで73歳かと思わせるほど、インパクトがありますね」長久保陸さん（22）北茨城市はこう語ります。

自画像は陸さんの祖父智保さんが所有していました。昨年、他界され、高萩市に寄贈されます。智保さんや陸さんは四郎次の子孫にあたります。

「自画像は額に入れて茶の間の壁にずっとかけてありました。祖父の話では、赤水さんは地図を作るためいろいろところへ旅に出たというんですね。そのせいか、なるほど風格があるなと思っ見ていました」赤水さんは81歳でなお、こう書き送ります。

「私が命を惜しむのは『地理志』完成のためだけだ。お殿様の仰せを守り、ご恩に報いるにはただこの地理志にある。それなのに、お前たちは私の気持ちも知らず、（地理志よりも赤浜に戻ってきて欲しいというの）は、親不孝である」自画像の赤水さんは口をへんの字に結び、無精ひげ。執念、恐るべし、です。

フリーライター・岡村青

原則木曜の掲載です